

ファン・ルーラーのスキルダー批判の中心点

関口 康

皆さんは、クラス・スキルダー(Kraas Schilder)というオランダの改革派神学者のことをご存じでしょうか。

オランダではたいへん有名な人です。日本では、日本キリスト改革派教会以外のところでは、必ずしも知れ渡った名前とは言えないかもしれませんが。それでもキリスト教書店に行くと、何冊かの邦訳書を見つけることができますと思います。

さて、このたびわたしは、現在そのスキルダーを研究しておられる方(VR研メンバー)から、ご丁寧なメールをいただきました。研究会ホームページにアップしてある「アーノルト・アルベルト・ファン・ルーラー略伝」(拙訳)をお読みくださり、その中の以下の部分に出てくる「ファン・ルーラーのスキルダー批判」の内容は何ですか、というご質問でした。

「アーノルト・アルベルト・ファン・ルーラー略伝」(拙訳)

<http://homepage1.nifty.com/protestant/vanruler/biography/degroot.html>

「1937年と1938年、信条主義グループの週間新聞である『改革派教会』(De Gereformeerde Kerk)において、カイパーの一般恩恵論について四十五回にわたる連載シリーズが公表されたのち、この主題は『カイパーのキリスト教的文化の理念』というタイトルの下で出版された一つの研究書において拡大され、『われらの時代』(Onze Tijd)シリーズにおいて出版された(1940年)。この書によって、ファン・ルーラーは、カイパーの反定立政治(antithese-polotiek)という改革派の家庭内論争に介入し、とりわけ彼はK・スキルダーの立場を批判した。」

もちろんわたしは、このご質問に、すぐにお答えいたしました。書きながら、他の皆様にもいくらか役に立つこともあるのでは、と感じましたので、質問して下さった方に断った上、質疑応答の内容をメーリングリストで公表させていただくことにしました。なお、質問者に余計な迷惑がかからぬよう、匿名にさせていただきました。

2003年2月13日(木)

先生、こんにちは。関口です。

拙訳に関心を持っていただき、光栄です。わたし自身、正確な事情はほとんど分かっておりませんが、とりあえずお答えいたします。

質問者：「このファン・ルーラーのスキルダー批判についてその内容を教えて頂きたく願っております。この時期のGKNにおける、一般恩恵に基づいたV.ヘップやヘルマン・カイパーのNSBよりな姿勢に対する批判は理解できるのですが、スキルダーが反ファシズムの闘争をしている時期の批判はどのようなものであったのでしょうか？」

ファン・ルーラーのスキルダー批判は、彼の学界デビュー作というべき小さな本『カイパーのキリスト教文化の理念』（1939年）の中にあります。本書については『改革派神学』第29号に掲載されている牧田先生の論文、「A. ファン・ルーラーの神学的文化論の中心点文化論におけるカイパー批判に関連して」の中で詳論されていますので、ぜひご参照ください。牧田先生はこの論文の中でカイパー批判のほうをもっぱら取り上げて紹介なさっています。しかし同時に、スキルダー批判の書でもあったのです。

わたしはまだ、本書をきちんと読んでいませんので、内容を紹介する力はありません。スキルダーの名前が集中的に出てくるページを以下に列記しておきます。

『カイパーのキリスト教文化の理念』におけるスキルダーへの言及箇所：
6ページ、13～17ページ、117～124ページ。

本書6ページには、ファン・ルーラーが批判の対象としているスキルダーの論文の名前が、二つ出てきます。

Jezus Christus en het cultuurleven, 1932（イエス・キリストと文化的生）

Wat is de hemel?, 1935（天国とは何か）

前者の英語版全文（HTML版とPDF版）が、以下のURLに掲載されています。

http://www.visi.com/~contra_m/ab/cc/cc.html

この時期のファン・ルーラーがスキルダーのどこを批判していたかを知るには、実際に原文に当たっていただく他はありませんが、ファン・ルーラーの基本的スタンスを考えれば、容易に予測がつかます。

ファン・ルーラーは、カイパーのNHK離脱・GKN創立の当時カイパーと全面対決の関係にあったNHKの神学者Ph. フードマーカの路線を引き継ぐTh. L. ハイチェマ（オランダ最初のバルト主義者として有名）の教え子、つまりフードマーカの「孫弟子」として、その基本路線を受け継ぎました。

フードマーカのカイパー批判の中心点は、「党派として振舞う改革派（GKN）に対する抗議」（een protest tegen het optreden der Gereformeerden als partij）ということにありました。フードマーカは、国教会系改革派教会（NHK）の伝統であるオランダ信仰告白（ベルギー信仰告白のオランダ側の呼称）の第36条に根拠を求めつつ、国家為政者による教会の保護を認める「国民教会」（Volkskerk）の理念を擁護しました。

まさに、このオランダ信仰告白第36条に基づく「国民教会」の理念をめぐって、フードマーカとカイパーは真っ向から対立し、カイパーは国会為政者の保護から自由なGKN（総会派系改革派教会）、またそのことから自由なVU（アムステルダム「自由」大学）を創設することになりました。他方、この同じことをフードマーカ側から言いなおせば、「党派主義的に振舞い、国民教会として的一致を保つべき祖国の教会（NHK）の分裂を煽る、悪しき改革派である」という方向で語られる激烈な批判を生み出す原因にもなったわけです。

このフードマーカのカイパー批判を、ファン・ルーラーは受け継ぎました。その目からスキルダーを見ていたわけです。ご承知のとおり、スキルダーはGKNをさらに小さく割って出ることになりました。ファン・ルーラーから見て、スキルダーの姿は、オランダ改革派陣営の四分五裂を扇動する張本人に見えていたのではないのでしょうか。

「国民教会の擁護」というこの課題をめぐっては、同じ反ナチ闘争の時代にあっても、ドイツ側の視点とオランダ側の視点とでは、ある部分においては正反対のことを考えなければならなかった事情もあった、とわたしは理解しています。

ドイツにおいては、ナチス政権を打倒するために、告白教会の人々は、ドイツキリスト者のような「教会と国家との結託関係」を破壊するための闘いをしなければなりませんでした。

しかし、オランダにおいては、カイパーの「領域主権論」に基づく「中立国家」という

(甘い)理想を抱いた王室を中心とした国家が、ナチス・ドイツのデーモンの暴力的支配と闘うすべを知らず、思うがままに蹂躪されてしまいました。ナチスからの解放を願った改革派キリスト者たちは、自らの祖国を守るために、今こそ「教会と国家との協力関係」が必要であると考えました。ナチスの問題性を「神学的に」考え抜き、闘うすべを知っていたのは、(告白教会の影響を受けた)改革派(NHK)のキリスト者たちでした。

ところが、何たることでしょう。国家滅亡の危機に瀕し、その唯一の防波堤となりうるオランダの改革派諸教会が神学問題で四分五裂を続けている。国家と世界の問題について考えることよりも、(悪い意味での)「特殊領域」としての教会の中に引きこもっている。ファン・ルーラーは、カイパーの一般恩恵論がもたらす帰結は「ゲッター化の道」である、と見ていました。あるいはまた、「改革派神学は自己の殻に引きこもってはならない」ということも、後年に至るまで繰り返し語り続けました。そして、NHKとGKNの再一致・再合同の必要を、声を大にして提唱し続けました。かくあるこの神学者は、単なる政治的数合わせを求めるような人ではなかった、とわたしは見ています。ファン・ルーラーの同時代人の中で最も野合的に動いた改革派神学者は、ヘンドリクス・ベルコフではないかと思います。ファン・ルーラーは、頑固なまでに、「改革派であること」にこだわり続けました。真の意味で国家的責任を負うことができる「国民教会」としての「改革派教会」の再生を願っていたのです。

『カイパーのキリスト教的文化の理念』の原著をお読みにになりたいようでしたら、わたしまでお気軽にご連絡ください。上に書いたような視点から、ファン・ルーラーが当時のカイパー主義者やスキルダーたちを見ていたことを想定しながら読んでいただくならば、あまり的外さないで読み進めることができるように思います。

わたしも本当は、原文をきちんと読みたいところですが、いろんなことを一度に抱えてしまっていて、パンク寸前です。みんなで協力しあっていきたいものですね。

関口 康

2003年2月14日(金)

先生、こんにちは。関口です。

不十分な答えにもかかわらず、さっそくお返事いただき、ありがとうございました。

質問者：「ファン・ルーラーが指摘する「ゲッター化」は、さらにスキルダーで進んでいることを考えると、その指摘は納得できます。対立の契機で、戦える教会をつくりたいが為のものなのではないでしょうか」

おっしゃるとおりであると思います。昨夜のメールはとりあえず、ファン・ルーラー側の言い分を分析してただけです。しかし、彼の思想が現実的・实际的にどれくらい妥当性を持っていたかについては微妙です。なぜなら、NHK（国教会系改革教会）そのものが、当時から今日に至るまで、「神学的に」一致することができない体質を持った教会である、という判断があるからこそ、カイパーのGKN（総会派）が生まれ、スキルダーのVrijgemaakt（オランダ改革派教会・解放派）が生まれてきた、という事情を認めざるをえないからです。

事実、NHKはファン・ルーラーの『カイパーのキリスト教的文化の理念』が書かれた後、どんどん「バルト主義化」していきました。ファン・ルーラーの恩師のハイチェマ、またハイチェマと同世代のノールドマンズ、さらに、ファン・ルーラーと同世代のミスコッテやヘンドリクス・ベルコフあたりを中心にバルト神学の「輸入」が活発化し、伝統的・信教的・保守的な「改革派神学」は、改革派教会（NHK）内部で徹底的な批判にさらされるようになりました。

その中で、ファン・ルーラーが選んだ神学路線は、むしろNHKを離脱したヘルマン・パーフィンの『改革派教義学』などに最も近い（日本で言えば神戸改革派神学校の立場に最も近い！）伝統的・信教的・保守的な性格を持つものであったことを見逃すことはできません。NHKの内部には当時から今日に至るまで「改革派同盟」（Gereformeerde Bond）と呼ばれるまさに伝統的・信教的・保守的なグループがあるのですが、ファン・ルーラー自身はそのグループの正式な会員ではなかったものの、心情的には最も共鳴していたことを、ファン・ルーラーの息子さんが最近のインタビューで証言しています。

父ファン・ルーラーを語る（長男ケース氏へのインタビュー、拙訳）

<http://homepage1.nifty.com/protestant/vanruler/biography/kees.html>

これで分かることは、ファン・ルーラーは、GKN（総会派）やVrijgemaakt（解放派）の分裂騒ぎに対しては幾分苦々しく感じていたものの、神学的にはNHK内のバルト主義者たちに対してよりも、はるかにNHKの「外」の人々に共感していた、ということです。ということは、さらに別の言い方をするなら、ファン・ルーラーもファシズムに対しては明確な反対の立場をとり、闘いの姿勢を示していましたが、その闘いの神学の内容は、バルト主義とは一線を画すものであった、ということです。

しかし、この点は、なかなか理解されにくいものだったのではないのでしょうか。バルトの場合は、自ら「社会民主党」に入党し、「赤い牧師」と呼ばれることも厭わぬ仕方で、徹底的に（いわば）「左翼化」していきました。また、バルトは、「スイス改革派教会」の牧師として出発しながら、「改革派」という一定の枠組みの中にとどまることを嫌い、教派的にはどんどん抽象化していきました。これのほうは、一般の人々には理解しやすい面を持っているわけです。たとえば、このことから、わが国の「日本キリスト教団」が、バルトに追従していった理由も分かります。多数派形成を不可避とする政治的・社会的な運動と「改革派教会」としてのアイデンティティを守り抜くこととの間には、少なからぬ矛盾や葛藤があるのです。

実際、NHKの中でファン・ルーラーの立場は、多数派形成に失敗し、マイノリティの中に埋もれていきました。彼がNHKの大会内で発言力を持っていたのは、1950年代後半までです。1960年代からは（日本の教会と同じように）マルクス主義者の台頭があり、彼らとの教派内闘争の中で疲労困憊し、1970年12月には62才という若さで亡くなってしまいます。

このことを考えると、（言っても仕方がないことですが）もしファン・ルーラーがスキルダーのような「対立の神学」を徹底化させ、NHKを離脱するなりして、新しい「闘う改革派教会」を作っていたならば、彼は早死にしないで済んだかもしれません。「家庭内戦争」などという無駄骨で心身をすり減らしてしまうのではなく、もっともっと長く生き抜いて、ファン・ルーラー自身を著者とする金字塔としての『改革派教義学』が後の時代の者たちのために遺されたならば、そこからまた、神学の新しい時代が始まったかもしれない、と思わずにはられません。

ファン・ルーラーの「形成の神学」は「世界と人間に寄り添う神学」であると、わたしは理解しております。これは、ややもすれば、「お人好しの神学・お節介焼きの神学」になりかねないので、自分をすっかり磨り減らしてしまいます。「君子、危うきに近寄らず」と言いますが、自分の研究を徹底化したい人は、インフルエンザ菌がウヨウヨ漂う（？）世俗の波風に飲み込まれすぎないほうがよいのかもしれない。

最近やっとコンタクトがとれたファン・ルーラーの末娘、ベテック・ファン・ルーラー先生（アムステルダム自由大学社会学部教授）は、お父上の死について、「わたしの家族は、父の死を『殉教』であると理解しています」とお書きになりました。

本人はそれでよいかもしれない！

しかし、ベテック先生の年齢をうかがうと、どうやら、お父上が亡くなられたとき、彼女はまだ大学生になったばかり。ご兄妹は他に4人もおられました。お母さまは、5人の子どもさんを抱えて、路頭に迷うばかりです。

エライ人は、死んじゃダメですよ。生きて、生きて、ズブトク生き延びなければ。最近、（改革派教会を含む）日本の中堅世代の牧師たちが、次々に「突然死」を遂げています。自分を磨り減らし、疲れ果てた末に。これでよいのか、と怒りさえ感じます。

...あ、なんだか、だんだんグチっぽくなってしまいましたね、すみません...

というわけで、わたしは、ファン・ルーラーの「形成の神学」に夢と希望を見出す者ではありますが、しかし、彼の「殉教」を納得している者ではありません。「ゲッター化」もまたよし、と言うべきかもしれないと感じる今日この頃です。

先生も、くれぐれもご自愛くださいませ。それではまた。

関口 康

2003年2月14日(金) 追伸

先生、こんにちは。関口です。

今調べたところ、スキルダー先生も、なんと、ファン・ルーラーと同じく「62才」で亡くなっておられますねえ、う～む。カイパーは、83才まで生きたようですが。「ゲッター化」が牧師の長生きの秘訣、というわけでもないのかな（？）。

わたしは、日本キリスト教団で7年牧師として働き、32才で「離脱体験」をしました。カイパーのNHK離脱は49才。スキルダーのGKN離脱は54才。

離脱するなら「早め」のほうが負う傷も少なく、長生きできると言えるかもしれません。

...あ、冗談ですよ。それではまた。

関口 康

<特別寄稿>

2003年3月8日（土） 牧田吉和先生から寄せられたメール

ファン・ルーラーのスキルダー批判について

ファン・ルーラーのスキルダー批判について論じる責任が、スキルダー研究にいささかでも関わってきた者として私自身にはあると思います。しかし、残念ながら、間近に迫ってきた学生会修養会の講演準備に追われておりまして（「恋愛」が表立った主題ですが、実際には「性」について扱って欲しいという講演依頼です。今までで最も困難な講演の課題です。今真剣に神学的に考える作業をしているところです）、したがって、小生に問いに答える十分な時間がありません。

ひとことだけ言っておきます。ファン・ルーラーからみれば、スキルダーもカイパーの線に立つ人です。ファン・ルーラーは、カイパーにおける「一般恩恵」と「（再生の恩恵としての）特別恩恵」の構造が、二元論的にその対立の契機を強め、結果的に特別恩恵の領域がゲッター化してゆくことを批判しました。ファン・ルーラーからすると、スキルダーの場合はこの線を強化したことを意味します。一箇所だけ引用します。

「スキルダーが独自で自由なキリスト教的反定立文化（*anthithetische cultuur*）をカイパーよりもはるかに堅固に基礎付けたことは否定できない。ここにはまさに「再生の文化」としてのキリスト教的文化がある。ここでは、この根本的思想からあらゆる結論が実際に導き出されて来るのである。それは首尾一貫したものであり、独自のものであり、自

己充足的なものでさえある。一言で言って、”キリスト教文化の絶対化”がここでは何の疑いもなしに提示されているのである)(Kuypers idee eener christelijke cultuur ,p.122)

要するに、スキルダーの場合には、カイパーの特別恩恵に基づく「再生の文化」としてのキリスト教文化の徹底化にすぎないというようにファン・ルーラーは見ているということです。ファン・ルーラーのカイパー批判からして、このスキルダーの道が否定されるのは当然です。

牧田吉和